

# 文献院古道の意味するもの

——漱石の英語英文学研究に対する心的態度の変容——

大 森 裕 實

## On the Meaning of Soseki's Posthumous Buddhist Name “Bunken'in-Kodo” in Light of his Change of Attitude towards Studies in English Language and Literature

Yujitsu OHMORI

The aim of the present paper is to explain the meaning of Soseki's posthumous Buddhist name “Bunken'in-Kodo,” taking account of the relationships between his change of attitude towards studies in English language and literature, and Social Darwinism, which he disgustedly admitted had influenced his life and thought during his study abroad in London and afterwards. Soon after returning to Tokyo, in the very first year of the 20th century, Soseki, who would become one of the greatest modern writers, gave an interesting lecture on English literature, later published under the title “Bungakuron,” which is regarded as a compilation of the researches he undertook over two years of study at government expense in London (although at the time it was received unfavourably or in some cases rejected by students at the University of Tokyo). In order to deeply understand Soseki's ideas described in “Bungakuron,” it is important to pay attention to another lecture of his, “My Individualism,” delivered at Gakushuin University in 1914, where he made a pertinent remark that one should depend not on others but on oneself, and should pursue one's own ends, which would lead to satisfaction or happiness in one's life, even in the world of Imperialistic Socialism. In the context of the name “Bunken'in-Kodo” given to the distinguished writer after his death, “Bunken'in” means that Soseki tried to plumb the depths of his field of learning, “philology” in a broad sense, whereas “Kodo” implies that after repeated vacillation he

attained a state of mind in which he felt he should return to his approval of Japanese people's traditional ways of learning, such as the study of Chinese classics to which he was accustomed at an early age, while discarding studies in modern English literature and abandoning Social Darwinism as incomprehensible to Orientals.

## 序

本稿は、近代日本の黎明期を代表する文豪にして英文学者であったとされる夏目漱石、本名は夏目金之助（1867-1916）の英語英文学研究に対する心的態度の変容と社会進化論主義の関係を改めて問い直すものである。表題に掲げた「文献院古道」とは正確には「文献院古道漱石居士」のことをいい、東京の雑司ヶ谷墓地に眠る夏目金之助の戒名であるが、本稿の試みは、そこに戴く「文献院」と「古道」の内包する眞の意味とは何かを考究し、それに結論を得ることにある。

本論を進める基礎知識として、一般に理解されている夏目漱石の経歴はおおた次のようにまとめることができよう。夏目金之助は1867(慶応3)年1月、東京牛込の生まれで、一時、塩原家の養子となるも、故あって生家にもどり、第一高等中学予科及び本科から東京帝国大学文科大学英文科に進んだ。在学中に初代英文学教授のディクソン (James Main Dixon, 1856-1933) の求めに応じて作成した、鴨長明の『方丈記』の英訳は秀逸であり<sup>1)</sup>、金之助の書きことば英語能力の高さを示している。卒業後は大学院〔旧制〕に進学するも、3ヶ月後には、生計のために、嘉納治五郎が校長を務める東京高等師範学校で英語を教えた。その後、松山の愛媛県尋常中学校を経て、熊本の第五高等学校教授となる。この時期、1900(明治33)年から2年間の英国への国費留学を文部省から命ぜられ、文部省派遣第1回〔専門学〕留学生となるも、ロンドン滞在中の神経衰弱については有名——文部省専門学務局長にあった上田万年(東京帝国大学教授・国語学)の命じた正式研究題目は「英文学研究」ではなく「英語研究」であった。帰国後、東京帝国大学、第一高等学校、明治大学で講師を務める——特に、東京帝大では、不本意ながら辞去した講師ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn [小泉八雲], 1850-1904)の後任として「文学論」を講じたが、その内容の著しい相違から学生の不評を買った。そもそも教職に不

向きであると認識していた金之助は、1907(明治40)年には教壇を去り、朝日新聞社に入社し——この時点ですでに『吾輩は猫である』と『坊ちゃん』は発表済みであり、職業作家としての道を歩んだ。雅号の「漱石」は漱石枕流(ソウセキ・チンリュウ)[石ニクチススギ流レニ枕ス]の故事に因むが、帝大からの文学博士号授与も固辞した辺りに、「自己本位」を貫こうとする漱石の志が窺える。1910(明治43)年には、転地療養先の伊豆で持病の胃潰瘍が悪化して、いわゆる「修善寺の大患」事件が起こる。これが後の「則天去私」の思想化に影響を与えたと考えられている。1914(大正3)年に学習院輔仁会で講演した「私の個人主義」は、漱石の「自己本位」思想と英国留学と『文学論』の関係を雄弁に語っている点で貴重である。「則天去私」を追及した『明暗』を朝日新聞に連載中の1916(大正5)年12月に逝去した。戒名は前述したように、文献院古道漱石居士という。門下生には、四天王と呼ばれる安倍能成、小宮豊隆、鈴木三重吉、森田草平の他、芥川龍之介や寺田寅彦などがあることでも知られている。

### 院号〈文献院〉の示唆するところ

夏目漱石(漱石という名は、作家として立身してからの雅号であるから、この段階では金之助と記すべきかもしれないが、便宜上、本稿では今後は漱石で統一する)が自身の基礎とした漢籍の知識と経験則をもって英文学を見究めようと煩悶を繰り返した——つまり、文学研究者たらんと鋭意努力したことはつとに知られた事実であり、また、そのアカデミズムの道を諦めて、独自の作品を創造する文学作家を目指し、それに成功したことも知られている。それならば、戒名は文献院となるのは不思議なことではないが、いささか現世の活動に直截的な院号であるとの印象は否めない。実際のところ、同時代に活躍した森鷗外の戒名は貞献院殿文穆思齋大居士である。

漱石の戒名に記された院号「文に献じた」とは文学研究、もう少し広く解釈すれば、フィロロジ(Philology)に一身を奉げたことを意味しているのであろう。フィロロジとはギリシア語の“love of words/learning”を意味する philologia を語源とする学問で、邦訳は「文献学」だが、一般的には古めかしい訓詁の学としてのイメージが定着している。そもそも、英語を通してさまざまな分野を考究する学問は「英学」と称される——通常、

それは文明開化黎明期に欧米文化摂取という脱亜入欧思想のなかで行なわれた英語研究を意味する。他方、英語について考究する学問は「英語学」と称され、こちらがフィロロジ—そのものである。実際、漱石には、東京帝国大学の姉崎正治から「英語学試験委員」（英語に関する試験の出題・監督・採点の責任委員）を委嘱されたが、それを断った記録があることから（1906.2.15書簡）、当時の「英語学」の表わす範囲の広いことが分かる。

本邦におけるフィロロジ—研究の系譜は、東京帝国大学で教授職に就いた市河三喜（1886-1970）に始まる<sup>2)</sup>。市河は帝大で博言学を専攻し、ローレンス（John Lawrence, 1850-1916）の下で欧州 Philology の学風と科学的英語学研究の実際を学んだとされる。このローレンスと漱石は一時期、帝大英文科で時間を共有したようであり、ローレンスが英国流の English Seminar（学生の能力に応じて個人的教授を試みるもの）を導入し、英文テキストを語学的に精緻に読む訓練を基礎とする教育方法を推進しようとしたことに対して、漱石は必ずしも協力的ではなかった。同期の上田敏——漱石及びアーサー・ロイド（Arthur Lloyd）と並ぶハーンの後任が新設の京都帝大英文科に転出すると、東京帝大英文科の中核的存在はローレンスに移り、結果、漱石が1907(明治40)年に退職する誘因となったのではないかと推測される〔亀井（2007: 下巻463-64）〕。このような時代を背景とする市河三喜は、「英学」「英学者」「英学界」といった語句を「英語」という言語を通じて英国の文学、さらには文化を理解することを目指す English Philology（独語の Englische Studien, Anglistik に相当）の意味で使用したようである〔寺澤（1978: 255）〕。すなわち、時代的背景や思想を考慮外に置けば、「英学」と「英語学（文献学）」の区分はそれほど明確ではない。フィロロジ—について、現代の英語を理解するために、書かれた文献（過去の知的遺産）を通して行なう広義の「言語文化学」であると再定義することができれば、市河がいうように、それを英学と呼んでもよい。

また、英国のオックスフォード大学やケンブリッジ大学における英文学研究とは、本来は、ギリシャ語やラテン語による古典文学の知識を基礎に、古英語（OE）や中英語（ME）で書かれた中世英語英文学を研究することであったから<sup>3)</sup>、漱石が大学入学前に、幼少の頃に学んだ漢籍における『左国史漢』——『春秋左氏伝』『国語』『史記』『漢書』といった歴史書研究のようなもの、すなわち、訓詁的考証学を英文学研究であると「漠然と冥々裏に」想定したことは、上掲のフィロロジ—研究という視点からは、あな

がち標的外れであったとは思われない。しかし、東京帝大における唯一の第2回英文科生として<sup>4)</sup>ディクソンから教授された「歪んだ英文学」(後年、漱石自身が「果してこれが英文学か何うだか」「英文学はしばらく措いて、第一、文学とは何ういうもんだか、是では到底解る筈がない」と批判したもの)——すなわち、英文法・英作文・英発音を中心とした語学学習が主で、英文学史の断片的知識(ワーズワースの生歿年、シェイクスピアのフォリオの種類、スコットの作品の年代順等)を記憶するだけの浅薄なものにより、「何となく英文学の欺かれたるが如き不安の念」<sup>5)</sup>を抱くことになった。換言すれば、大学卒業後においても英国留学中においても、漱石は「英文学とは何か」という問いに対する解答を十分に用意できない状態にあった。さらに、20世紀初頭における英国の大学における英文学研究では、例えば『サイラス・マーナー』(George Eliot, *Silas Marner*, 1861)のような女流作家作品の研究が行なわれており、また、「大学にて女生徒が講義の後に Prof. に向い Keats 及び Landor の綴りを聞いたるを見しことあり」て、「英国人なればとて文学上の智識において我より上なりと思ふなかれ」(1901.1.12『日記』)との心境、つまり、本場の英文学研究への幻滅を吐露しているが、それは結果的に、留学前から漱石の脳裡に去来していた「何となく英文学の欺かれたるが如き不安の念」を増長させることになったことは確かである。

さて、時系列の点で少し遡るが、漱石は英国に到着するとすぐに、ケンブリッジで詩人コレッジとの別名をもつ Pembroke College を訪ねるも、授業料と生活費の関係から、そちらで学究生活を送ることを断念し、オックスフォード大学でも同様であろうとそれを諦めた。エジンバラ大学は英語習得という観点からは排除して<sup>6)</sup>、結局はロンドン大学の University College におけるケア (William Paton Ker, 1855-1923) の英文学史の講義に出席する。しかし、そちらも2ヶ月程度でやめてしまう。そもそも、ケアは中世英文学の碩学であったため、現代英文学についての言及が十分ではなかった、あるいは、その必要性を感じていなかったのではないかと推測されるが、その意味では、留学時期の漱石のなかに、史的観点からの英文学研究とは異なる何かを模索する心的態度が増幅していたことを窺わせる行動である。その後、ケアの紹介で、ペーカー街に居住するシェイクスピア学者クレイグ (William James Craig, 1843-1906) に英語を個人教授してもらうことになり、約1年間にわたり週1回通ったが(1時間5シリング)、

これにも満足が得られなかった。しかし、The Arden Shakespeare の編者であったアイルランド出身のクレイグとの英文学談義は、英語を習うというよりは、漱石にフィロロジ研究の深淵とそれに取り組む学究的態度を十分に伝えたものと推測できる(『永日小品——クレイグ先生』(1909)参照)。

このような経験をもつ漱石が、後年、東京帝大英文科においてローレンスが新たに導入しようとした English Seminar という名のチュートリアル(学生の能力に応じて個人的教授を課程外に行なう、極めて英国的なもの)に協力的な姿勢をみせなかったことは一見矛盾すると思われる。しかし、その理由を推論すると、第一には、文部省による漱石に対する英国留学辞令が「英語研究ノ為メ満二年間英国へ留学ヲ命ズ」となっているにもかかわらず、「英語授業法ノ取調」や「語学訓練」を果たさずに帰国した漱石には、ローレンスが意図した英文テキストを語学的に正確に読む訓練を行なう指導法に違和感があり、かつ、自身が新たに展開しようとする「英文学を根本的に探究する試み」が学生にいつそうの空虚感を与えるかもしれないという懸念を抱いたからではないかと考えられる。漱石の留学期間における英文学研究への関心は、僅か2年の期間で英語という外つ国のことを習得することは不可能であると判断した結果、自身にとって最も効果の上がる研究は何かと熟考し、たどり着いた結論である。そして、「文学を研究せば如何なる方法を以て、如何なる部門を修得すべきか」を考究した結晶が文学論の講義内容であり、そこにはコスモポリタンな学問を標榜する漱石の懸命さが感じられる。また、第二には、かつて自身が日本の大学で経験したディクソンとの一対一の授業や、英国留学中に経験したクレイグとの個人授業から、教授者との相性次第で学問に対する思考や心的態度が左右されることを憂慮した——換言すれば、他人本位から自己本位を追究する漱石の厳しさが顕在化したことに帰因すると推察できる。

### 漱石における普遍性探求の萌芽と社会進化論

漱石が帰国後著わした『文学論』(1906(明治39)年)の「序」に「〈漢学に所謂文学〉と〈英語に所謂文学〉とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざるべからず」と記述しているように、漱石のなかで東洋的価値観と西洋的価値観の衝突があったことは確かであろう。

ここに記された〈漢学に所謂文学〉とは、アジアを支配した帝国として

の中国が、その漢字・漢文で書き遺した文献（過去の知的遺産）を通して行なう訓詁の学であり、儒学を中心に置いた言語文化学であるが、一方、〈英語に所謂文学〉とは、19世紀後期には清国やインドをも含めた世界を支配する大英帝国の統治する言語圏で共通する *lingua franca* としての英語で書かれた文献を読み解く、今を生きる学であり、普遍性に根ざした科学であり、勝者の学を意味すると理解できる。「世界の構図が、帝国の時代から帝国主義の時代に、大きく転換する中、かつて自らが属していた帝国としての清国に、日清戦争で勝利しながらも、三国干渉に譲歩せざるをえず、西欧列強と並ぶ帝国主義をめざす日本の官費留学生として、大英帝国の首都に派遣された一人の男は、崩壊しつつあるかつての帝国の国際性における異質性を、文学という名のもとに考えようとしたのである」[小森(2010: 324)] という指摘は正鵠を射た言表である。

英国留学中の漱石に「学問の普遍性」を意識させる契機が、池田菊苗との交流にあったことは明らかである<sup>7)</sup>。池田がベルリンからロンドンに渡り、漱石の下宿に宿泊して、理科及び文科の多方面にわたる談義に花を咲かせ、それが漱石の思想に、延いては後の『文学論』の構想に影響を与えたことは想像に難くない。池田のロンドン入りは1901(明治34)年5月5日のことである。同年5月6日には池田を研究先の Royal Institute に案内し、「夜12時過ぎまで池田氏と話す」、5月9日「夜、池田氏と英文学の話」をなす。同氏は頗る多読の人なり」、5月15日「池田氏と世界観の話、禅の話などす。氏より哲学上の話を聞く」、5月16日「夜、池田氏と教育上の談話をなす。また、支那文学について話す」、5月20日「夜、池田氏と話す。理想美人の description あり……」との記述が認められる(いずれも『日記』より)。同年6月26日には池田はケンジントンに転居して、以後は書面でのやり取りとなり、同年8月に帰国した。漱石が池田から受けた影響が随分と大きかったことは、寺田寅彦(第五高等学校時代の教え子)に宛てた手紙で「学問をやるならコスモポリタンのものに限り候。英文学なんかは縁の下の力持、日本へ帰っても英吉利においてもあたまの上がる瀬は無之候。……僕も何か科学がやりたくなった。……僕の趣味は頗る東洋的発句的だから倫敦などにはむかない」(1901.9.12)と述べたことから明らかである。また、友人の菅虎雄に宛てた葉書に「……近頃は文学書杯は読まない。心理学の本やら進化論の本やらやたらに読む……」(1902.2.26)と書いたことから判断すると<sup>8)</sup>、学問方法を科学主義に求め、

社会学や心理学から得られる知識を総合した文学研究を迫及し始めたことが看取できる。

ところで、この時代、ダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809–1882) の進化論は、ある趣の曲解のもとに、スペンサー (Herbert Spencer, 1820–1903) による社会進化論 (Social Darwinism)、すなわち、社会有機体説として人口に膾炙した。多用される術語「進化(論)」(theory of **evolution**) はダーウィン著『種の起源』(*On the Origin of Species*, 1859) の記述に先行し (1952年)、「適者生存」(**survival of the fittest**) [ダーウィンがいうところの **natural selection**] はスペンサーの造語である (1864年) [いずれも OED 参照]。ダーウィンの生物進化論に対応して、全自然・社会の相互関連の進化という「総合哲学」——進化論原理を諸分野で展開する可能性を論じ、形而上学、生物学、心理学、社会学、倫理学の総合哲学大系を唱えた。やがて、社会進化論はスペンサーの自由主義的なものから変質し、「適者生存」や「優勝劣敗」という発想から強者の論理と結合して、帝国主義による侵略や植民地化を正当化する論理として為政者に利用されたが、この「適者生存」や「優勝劣敗」という考え方が漱石に与えた影響は大きかったことであろう。

また、心理学のほうも、ヴント (Wilhelm Max Wundt, 1832–1920, 独) が生理学の実験方法を実践する心理学実験室を開設し (1879年)、リボー (Théodule Armand Ribo, 1839–1916, 仏)、モーガン (Conwy Lloyd Morgan, 1852–1936, 英)、スクリプチュア (Edward Wheeler Scripture, 1864–1943, 米)、グロース (Karl Groos, 1861–1946, 独) といった人々による心理学が展開し、ジェームズ (William James, 1842–1910, 米) の機能主義的心理学 (Pragmatism) が世間の注目を集める時代であった。「社会学と心理学は相互に関連しながら発達し、それが人間の営みのすべてを解明しうる普遍性をもつ学問であるかのうように、受け止められる傾きも生じた」時代であった [亀井 (2007: 436–37)]。次節で述べるように、留学中に〈自己本位〉を確立しようと考えた際に、これらの学問のもつ普遍性こそが漱石に方向性を与えたのだといえる。

### 『文学論』に管見される心理学・社会学からの直截的影響

英国留学を契機に漱石は英文学研究の方法について、まったくの他人本

位であったことに気づいたという。「譬へばある西洋人が甲といふ同じ西洋人の作物を評したのを讀んだとすると、其評の当否は丸で考へずに、自分の腑に落ちやうが落ちまいが、無暗に其評を触れ散らかす」自分があったことを反省する。「いくら人に誉められたって、元々人の借着をして威張ってゐるのだから、内心は不安である」ことを認め、「此時私は始めて文学とは何んなものであるか、その概念を根本的に自力で作上げるより外に、私を救う途はないのだと悟った」のだという（『私の個人主義』より）。そこで、漱石は下宿に立て籠もり、一切の文学書を行李の底に取めた。その理由は、「文学書を読んで文学の如何なるものかを知らんとするは血を以て血を洗ふが如き手段たるを信じたればなり」（『文学論』「序」より）。つまり、「文芸に対する自己の立脚地を堅めるため、堅めるためといふより新らしく建設する為に、文芸とは全く縁のない書物を読み始め」、「科学的な研究やら哲学的の思索に耽り出した」のである（『私の個人主義』より）。これは、概念的には、他人本位ではなく自己本位ということをよく考えて、その自己本位を立証するためであり、具象的には、「心理的に文学は如何なる必要あつて、この世に生れ、発達し、頽廢するかを極めんとし」、また、「社会的に文学は如何なる必要あつて、存在し、隆興し、衰滅するかを究めんと」することであつた（『文学論』「序」より）。

もっとも、この表現は帰国後に冷静に自身を客観視して成されたものであり、英国留学中の漱石にはもっと壮大な意図があつたのではないかと推測される。事実、義父の中野重一宛ての書簡（1902.3.15）には次のように大言壮語してみせている。なお、漱石が帰国の途につくのは1902(明治35)年12月のことである。

小生の考にては「世界を如何に観るべきやと云ふ論より始め夫より人生を如何に解釈すべきやの問題に移り夫より人生の意義目的及び其活力の変化を論じ次に開化の如何なる者なるやを論じ開化を構造する諸原案を解剖しその聯合して発展する方向よりして文芸の開化に及す影響及その何物なるかを論ず」る積りに候 斯様大きな事故哲学にも歴史にも政治にも心理にも生物学にも進化論にも關係致候故自分ながらその大胆なるにあきれ候……。

結果、留学期間の残りの半年余を費やして、「蠅頭の細字で5寸乃至は6寸の高さに達する」ノートを漱石は作成し、それを唯一の財産として帰

国した。漱石が眦を決し、全身全霊で取り組んだ上掲のノートを基にして東京帝大英文科で講義した内容が後の『文学論』ということになるが、果たして、その記述にどの程度まで、心理学や社会学の引用が行なわれているであろうか。小森(1995:95)に拠れば、『文学論』を構想するための基礎知識とした参考書籍は次の3つに分類される。

- ①後述のエリス(Havelock Ellis)が編集したThe Contemporary Science Series 所収の科学や心理学の書籍。
- ②前述のスペンサー(Herbert Spencer)の流れをくむ社会学——当時の社会進化論(Social Darwinism) 関連の書籍。
- ③ナイト(Knight)教授の編集したThe University Extension Manuals 所収の歴史学、倫理学、美学に関する書籍。

ここから分かるように、最先端の科学的心理学は、それまでのようには精神と身体とを厳密に峻別しない心身一元論の特徴をもっていた。「人間の身体的な知覚や感覚を、〈文学〉をとらえ直す際の前提にすることで、『文学論』は国家や民族の言語にとらわれない普遍性をもつことになる」ことを意味していた[小森(1995:96)]。

ところで、前節において指摘したように、社会進化論の影響を受けたにもかかわらず、『文学論』には心理学からの術語や引用のほうが社会学からのものに比較すると圧倒的に多い。「意識の波」は繰り返し使用される象徴的術語である。ここで、心理学と社会学関連で引用された学者名を挙げて参考に附す——リボー(Theodule Armand Ribo, 1839-1916)、モーガン(Conwy Lloyd Morgan, 1852-1936)、スクリプチュア(Edward Wheeler Scripture, 1864-1943)、アーノルド(Matthew Arnold, 1822-1888)、グロース(Karl Groos, 1861-1946)、ウィンチェスター(Caleb Thomas Winchester, 1848-1920)、ヴント(Wilhelm Max Wundt, 1832-1920)、アレン(Charles Grant Allen, 1848-1899)、フェヒナー(Gustav Theodor Fechner, 1801-1887)、ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)、ギュイヨー(Jean Marie Guyau, 1854-1888)、トムソン(John Arthur Thomson, 1861-1933)、エリス(Havelock Ellis, 1859-1939)、デルブーフ(Joseph Rémy Leopold Delbœuf, 1831-1896)、バイン(Alexander Bain, 1818-1903)、ジェイムズ(William James, 1842-1910)、スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)、エマソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-1882)、ルトウルノー(Charles Jean Marie Letourneau, 1831-1902)、ロンブローゾ(Cesare Lombroso, 1836-1909)、ホブハウス(Leonard

Trelawney Hobhouse, 1864–1929)、コント (Auguste Comte, 1798–1857)、クロウジア (John Beatti Crozier, 1849–1921)、カーライル (Thomas Carlyle, 1795–1881)、ルナン (Joseph Ernest Renan, 1823–1892)、ホブズ (Thomas Hobbes, 1588–1679)、レッシング (Gotthold Ephraim Lessing, 1729–1781)、メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn, 1729–1786)、ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer, 1788–1860)、フィッシャー (Kuno Fischer, 1824–1907)、マクスウェル (James Clerk Maxwell, 1831–1879)、ロツツェ (Rudolph Hermann Lotze, 1817–1881)、ブンゼン (Robert Wilhelm Bunsen, 1811–1899)、マンテガッツァ (Paolo Mantegazza, 1831–1910)、ブランデス (Georg Marris Cohen Brandes, 1842–1927)、ボールドウィン (James Mark Baldwin, 1861–1934)、ル・ボン (Gustave Le Bon, 1841–1931)、パスカル (Blaise Pascal, 1623–1662)、マーシャル (Henry Rutgers Marshall, 1852–1927)、マルサス (Thomas Robert Malthus, 1766–1834)、ビュフォン (Georges Louis Leclerc de Buffon, 1707–1788)、ダーウィン (Erasmus Darwin, 1731–1802)、ラマルク (Jean Baptiste Pierre Antoine de Monet Lamarck, 1744–1829)、ウォレス (Alfred Russel Wallace, 1823–1913)、ヘッケル (Ernst Heinrich Haeckel, 1834–1919)、ハクスレー (Thomas Henry Huxley, 1825–1895)、ベートソン (William Bateson, 1861–1926)、ヴァイスマン (August Weismann, 1834–1914)、ケルヴィン (Lord William Thomson Kelvin, 1824–1907)、ハッドン (Alfred Cort Haddon, 1855–1940)、ミュアヘッド (John Henry Muirhead, 1855–1940)、コンウェー (Sir William Martin Conway, 1856–1937)、スターバック (Edwin Diller Starbuck, 1866–1947)、モリス (William Morris, 1834–1896)、マコーレー (Thomas Babington Macaulay, 1800–1859)、ゴドウィン (William Godwin, 1756–1836)、ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759–1797)、ウォード (Sir Adolphus William Ward, 1837–1924) 等。

さらに、『文学論』の構想に進化論及び社会進化論からの直截的影響があったことを明らかにするために、特にダーウィンとスペンサーに言及した箇所を引用して、提示しておく。

**[Darwin 関連への言及]**

- ・「この条につき一寸注意すべきは肉食鳥類 (birds of prey) の飛行に伴ふ美感のしばしばかの国人によりて特筆せらるることなり。(我国の詩歌にこのこと少なし)。Darwin かつてその著 *The Voyage of the Beagle round the World* にいへることあり。」(I. ii)

- ・「Darwin は進化の核を有して鳥獸を見、妻子を見、かねて天子を見るものなり。蕪村は俳句の核を有して、日月を見、星辰を見、奴婢を見、また王侯を見るものなり。」(V. i)
- ・「もし Malthus の人口論にして推移する事なければ吾人は遂に在来の形式においてその所説を繰り返さざるを得ず。Darwin なるものありて、一道の暗示を這裏に得来るや、朝釀暮醇十年已む事なし。而して、一旦機縁の熟するとき発して進化論なる新らしき F に天下の勢を推移せしむ。これ Darwin の推移にしてかねて、天下人心の推移なり。この推移なきとき吾人の理性は一所に停住して幾多の煩悶と苦痛を受く。」(V. iii)
- ・「この種の推移を実例に求むるとき……。一進化論を取つて検するもまたこの撰に洩れざるを見る。上代希臘の昔を説くは固より遼たりと雖ども、単に近世進化論の発達のみを討究してさへ既に一朝一夕の産物にあらざるを悟るは容易なるべし。その Buffon (1707-1788) に始つて Erasmus Darwin に至り、Darwin を通じて Lamarck に伝へ、Lamarck を承けて遂に C. Darwin の起りしは人の知る所なり。しかも Darwin に至つて進化論はその発展を尽したるにあらず。Spencer あり、Wallace あり、Haeckel あり、Huxley あり。遂に Bateson を出し Weismann を出して暗示の伝授は皆徐々として次第ならざるなし。」(V. v)

#### [Spencer 関連への言及]

- ・「……教育あるものまたは所謂高襟者流の恋は頗る入込みたるものなること勿論なり。Spencer はその『心理学』に恋を下の如く解剖せり。」  
(I. ii)
- ・「恋愛にも、かの Spencer が指摘せる如き幾多複雑の分子あつて始めて興味津々たり得べし。」(I. ii)
- ・「仮令ば Spencer が説きし恋の如く種々の成分が一の齟齬するところなく相集りて一情緒を構成することあり。」(I. ii)
- ・「碩学 Spencer がその大著において科学を目するに至高至大の力なりとし、これを吾人精神界の女王に擬し、世の芸術文学はすべてその賞讃を目的としてこれに隷属する侍女なりと説きしより、余が意見は勿論、世間大方の意向はこれによりて著しく根本的变化を受けたるに似たり。」  
(III. ii)
- ・「英の哲学者 Spencer はその著『文体論』においてこれを詳述せり。一歩を進めて複雑の方面に向ふとき主賓の地位及長短の弁に入る。吾人の

先に調和法を説けるや、主材と客材とを分ちてその長短の比例を論じたるは、……」(IV. viii)

## 院号〈古道〉の意味するところ——社会進化論を否定する東洋回帰

幼少の頃から漢詩・漢文に親しみ、儒教的な倫理観や東洋的美意識、さらには江戸の感性に目覚めた漱石に英語を勧めたのは長兄の大助（病気で大学南校を中退し、警視庁で翻訳係の職にあった）であり、凋落した夏目家の再興を才気ある漱石に託したのだという。大助は、漢籍のような時代遅れのものやっていると、優勝劣敗の時代から落ちこぼれることを憂慮して、英語を勧めたとされる。そこで、漱石は、不本意ながら、必ずしも得意ではなかったと思われる英語を成立学舎という英語塾で勉強して、大学では英文科を選択し、英文学を修めることにした。

なぜ漱石が不本意な英語を最終的に選んだかといえば、一つには、英語学は進化論的世界観における勝者であり、漢学は敗者であると青少年ながらに漠然と考えたからであり、それは大学卒業後の松山中学や熊本第五高等学校での教職及び英国留学において、いっそう強く感じられるようになったと思われる。実のところ、漱石は進化論に英国で初めて出会ったわけではなく、進化論の日本への導入はすでに2名のお雇い外国人教師によって成されていた——モース (Edward Sylvester Morse, 1838–1925) : アメリカの生物学・動物学者で、1877(明治10)年に着任し、東京帝大の講義でダーウィンの進化論を紹介した。大森貝塚の発掘調査も行ない、日本の考古学・人類学の生みの親といわれる人物と、フェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa, 1853–1908) : アメリカの美術史家で、1878(明治11)年に着任し、東京帝大で哲学や経済学を講じた。狩野派等の伝統絵画の復興に尽力し、岡倉天心と鑑画会や東京美術学校を創設した人物を文明の窓口として、キリスト教の抵抗のない文明開化黎明期の知識階層に受け入れられていた。そうした時代背景にあって、漱石にとっての進化論の具現化が英文学であったと解釈してよい。また、もう一つの理由としては、当時の英文科が教員養成に主眼を置いていたことを考慮すると、糊口をしのぐための実用的価値の高い分野を選択したのではないかも推測できる——この時の漱石に、夏目家再興の意識があったかどうかは判らない。英国留学を終えて帰国してからも、「所が帰るや否や私は衣食の為に奔走する義務

が早速起こりました。私は高等学校へも出ました。大学へも出ました。後では金が足りないので、私立学校も一軒稼ぎました」と回想している（「私の個人主義」から）。そもそも、漱石は金銭感覚が鋭敏で、英国留学中も給費が低いことに不満を抱いており<sup>9)</sup>、後に、東京帝大の講師を辞して朝日新聞社専属作家に転職したのも、朝日新聞社が提示した報酬（月給200円に加えて、盆暮の賞与も漱石は要求）が大きな要因の一つである。

前々節で指摘したように、漱石は東アジアの漢字文化圏の伝統を背負いながらも、英文学を専攻し、英国留学を果たした。英文学を修める意義づけも、日本の近代化（脱亜入欧）の意義づけも、進化論的思想を前提として行なわれた。それは、優勝劣敗の世の中であり、適者生存の世の中を懸命に生き抜くことを意味した。しかし、漱石が勝ち組の最先端をいく大英帝国の首都ロンドンで経験したものは、自身の内と外との二律背反（ambivalence）に苦しむという事態であった。前にも引用したように、寺田寅彦に宛てた手紙のなかで、「学問をやるならコスモポリタンのものに限る候。英文学なんかは縁の下の力持、日本へ帰っても英吉利におってもあたまの上がる瀬は無之候」とその苦悩を吐露していることは象徴的である。

煩悶を繰り返した結果、漱石が到達した境地は、進化論的思想から英文学を修めることから脱却し、他人から借りた衣を脱ぎ捨てて、〈自己本位〉になることであった。すなわち、進化論的勝者である英国人による英文学研究の成果を鵜呑みにし、盲従し、それを得意げに吹聴する姿勢を反省し、「さう西洋人振らないでも好いといふ動かすべからざる理由を立派に彼等の前に投げ出して見たら、自分も嘸愉快だらう、人も嘸喜ぶだらうと思つて、著書其他の手段によつて、それを成就するのを私の生涯の事業としやうと考へた」のである（「私の個人主義」より）。そうすることによって、漱石自身が回想するように、「其時私の不安は全く消え」て、「私は軽快な心をもつて陰鬱な倫敦<sup>10)</sup>を眺め」ることができ（「私の個人主義」より）、進化論の呪縛から自信をもつて解放されたのである。後年、学習院の学生に対して、「もし貴方がたのうちで既に自力で切り開いた道を持つてゐる方は例外であり、又他の後に従つて、それで満足して、在来の古い道を進んで行く人も悪いとは決して申しませんが、（自己に安心と自信がしつかり附随してゐるならば、）然しもし左右でないとしたならば、何うしても、一つ自分の鶴嘴で掘り当てる所迄進んで行かなくつては行けないでせう。

行けないといふのは、もし掘り中てる事が出来なかつたなら、其人は生涯不愉快で、始終中腰になつて世の中にまごまごしてゐなければならぬからです」と説いているが、それは十分な説得力をもっている。そして、〈自己本位〉に開眼し、精魂こめて著わした『文学論』は「寧ろ失敗の亡骸」<sup>11)</sup>であつたと述懐する（私の個人主義より）——それは、スペンサー流の社会進化論の全面的否定でもあつた。

漱石が英国留学において、進化論的歴史観や社会進化論にやられてしまったことは明らかであろう。まず、肉体的特徴において「適者生存」にいう不適格者の烙印を押されてしまう。漱石は、黄色人種であり、五尺三寸に足らない小さな身長に加えて、天然痘の痕の残るあばた顔をしていたからである。また、精神的側面からも、「英国人は余を目して神経衰弱といへり。ある日本人は書を本国に致して余を狂気なりといへる」事態<sup>12)</sup>に陥り（『文学論』「序」より）、こちらについても不適格者の烙印を押されてしまったのである。

しかし、このような進化論的価値観から逸脱することこそが、普遍的個人を確立することに寄与することに漱石は気づいた。「帰朝後の余も依然として神経衰弱にして兼狂人のよしなり。……ただ神経衰弱にして狂人なるがため、「猫」を草し「漾虚集」を出し、また「鶉籠」を公けにするを得たりと思へば、余はこの神経衰弱と狂気とに対して深く感謝の意を表する」のであり、「余の神経衰弱と狂気とは命のあらんほど永続」することを断言するのである（『文学論』「序」より）——つまり、“ディジェネレート”（退化・頹廢）であることが、小説を書かせる原動力だと断言しているのである [小森(1995: 84)]。

そこで、文学研究を断念し、アカデミズムの世界と訣別した漱石は、文学作家として個人の確立を体現するよう試みるのである——「ただこの神経衰弱と狂気とは否応なく余を駆つて創作の方面に向かはしむるが故に、向後この「文学論」の如き学理的閑文字を弄するの余裕を与えざるに至るやも計りがたし」（『文学論』「序」より）。そして、漱石は再び東洋的な価値観へと回帰していくのであり、それこそ古道の意味するところであろう。『道草』（1915(大正4)年）に描かれた我執の人から、絶筆となつた『明暗』（1916-17(大正5-6)年）に描かれる予定であつたと思われる則天去私<sup>13)</sup>の人への変化こそが、漱石にとっては、近代人のとるべき進化の姿そのものであつたと考えられる。「不自然は自然には勝てないのである。技巧は天

に負けるのである。策略として最も効力のあるものが到底実行できないものだとすると、つまり策略は役に立たないといふ事になる。自然に任せて置くがいいといふ方針が最上だといふ事に帰着する」(『断片』1905-06年より)という言表は、無我・無私にて動けば、天すなわち大自然がその意思を下されるという「禅道」——無心・無我・自然法爾(親鸞の教え)に通じる思想を端的に示している。

## 結 語

本論は夏目漱石(本名は夏目金之助)の戒名として記された〈文献院古道〉のなかに込められた意味を読み解き、そこに近代日本の知識人を代表する漱石の英語英文学研究に対する心的態度の変容を考察した。

漱石の戒名に附された〈文献院〉という院号は単なる文学研究と創作活動に一身を献じたことを意味するだけでなく、その文学研究が狭義の英文学作品の批評にあらず、英語という言語を基礎に、歴史学・心理学・社会学(当時の社会進化論)・考古学・美学・哲学等を総合して行なう言語文化学、すなわち、広義のフィロロジ(Philology)の研究に貢献したことを意味している。

また、同じく戒名に記された〈古道〉のほうは、漢学を捨てて英文学を専攻することにより、進化論的価値観に基づく人生を歩もうとした漱石が、英国留学を経て、優勝劣敗や適者生存の原理と自身の存在意義を問い直した結果、再び東洋的価値観を体現する禅道に大転換したことを意味する。

漱石の思想は、〈自己本位〉による個人主義の確立——それは逆説的にも、文学研究の普遍性を追求した結果、得られた結論と、〈則天去私〉による(これもまた)個人主義の確立に収斂されるが、それは、社会進化論的観点から、近代日本のなかで、勝者を目指す自我に疑いや不安を抱き、自我の衝突と煩悶を繰り返した末に到達した、自我に固執しない悟りの境地に代表される。

漱石をして、そのような思想に至らしめた根源に、進化及び進化論のもつ実像と虚像について、当時の最先進国たる大英帝国でつぶさにそれを経験し、いち早くそれを感知した現実があったことは言を俟たない。

※本稿では、学問的民主主義の立場から、偉大な先達に対する敬称を割愛したが、ご海容願いたい。

※本稿執筆過程において、本記念号を奉じる佐藤徳潤教授から、仏教における院号についての懇切なご教示を賜わった。特記して、謝意を表する。

## 註

- 1) *A Translation of Hojio-ki with a Short Essay on it.* (1891.12.8) のこと。『方丈記』の冒頭は次のように英訳されている。「行く川の流れば絶えずして、しかも本の水にあらず、よどみに浮かぶうたかたは且つ消え且つ結びて久しく止る事無し……」“Incessant is the change of water where the stream glides on calmly: the spray appears over a cataract, yet vanishes without a moment’s delay……”

この英訳に朱を入れて、ディクソンは日本アジア協会で“Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel”という講演を行ない(1892.2.10)、『日本アジア協会会報』(1893)には“A Description of My Hut”として所収されているが、そこには漱石に対する謝辞が附記されている。

なお、ディクソンは1879(明治12)年来日し、1892(明治25)年に日本を去ったが、この間、最初の東京工部大学では齋藤秀三郎を、後に配置替えとなった文科大学では夏目漱石や岡倉由三郎を教えた。

- 2) 本邦初の英語学講座の主任教授に就いたのは、帝国大学で博言学を専攻し、卒業論文として1909年に「Forノ歴史的発達ニ就キテ」(手書き英文によるもので原題はA Monograph on the Historical Development of the Functions of “for”)を著わして、指導教官のローレンス(John Lawrence)からOEDの記述を補足するものとして高い評価を受けたフィロロジスト、市河三喜(東大)であり、日本英文学会の創設や英語教授研究所(現在の語学教育研究所)と深い縁をもつ——後者については、初代所長パーマー(H. E. Palmer)の後継者として、日本の英語教育の進路に影響を与えた。市河は優れた養弟家でもあり、氏の編纂した『英語学辞典』(研究社1940)の執筆陣(大塚高信・中島文雄・服部四郎・重見博一・岩崎民平・鈴木重威・佐々木達・清水護・木坂千秋・若林秀善・宮田幸一・神津東雄)をみると、当時の英語学の中心的研究者像とその分野が把握できる。市河の直系長兄は中島文雄(東大)と大塚高信(東京高師・文理大)ということになるが——事実、この二名はのちに『新英語学辞典』(研究社1982)を共編したが、東大系の場合、中島の跡を襲った講座はむしろ言語学的英語学に重きを置いたため、文献学的英語学は教養学部において継承されたといえる。それは、宮部菊男→寺澤芳雄→久保内端郎の系譜であり、「中世イギリス研究資料センター」の活動もその一環にある。また、都立大にも、松浪有→小野茂→忍足欣四郎の系譜が誕生

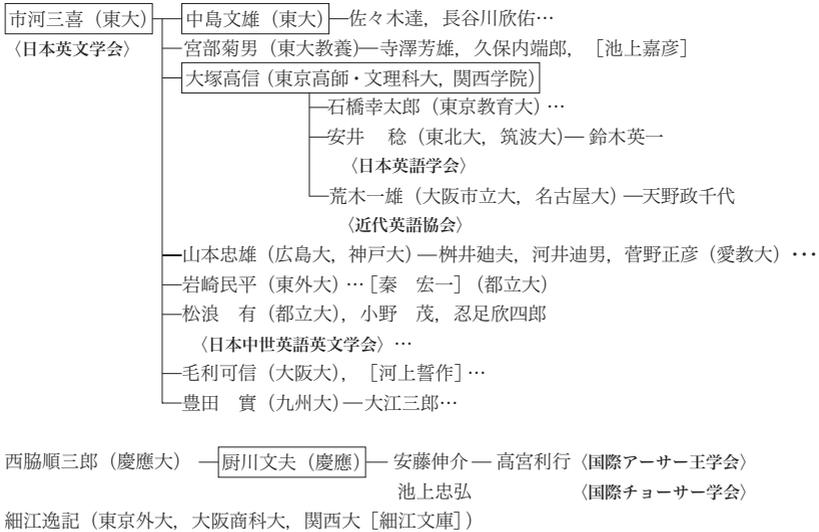
し、東外大系の秦宏一を加えて『英語発達史』(K. ブルナー著の英語史の邦訳書 1973)、東大系の今井邦彦を加えて『大修館英語学事典』(1983)を世に送り出し、東西それぞれに活動していた研究会を統合した日本中世英語英文学会の設立(1984)に寄与した。一方、大塚門下は文理大同期の二名の特筆大書すべき高弟、荒木一雄(大阪市立大→名古屋大)と安井稔(東北大→筑波大)を輩出したが、そのどちらも養弟家のよき伝統を引き継ぎ、その門下から多くの研究者が誕生したことは記憶に新しい——それらを総動員して『現代英文法辞典』(三省堂 1992)が編まれた。荒木の方は通時的であり、安井の方が共時的であったことも、それが相乗効果を醸成し、斯界の発展にとっては幸運であったという他はない。また、両名は既存の学会活動の不備を補い、英語学研究的活性化を意図して、奇しくも同じ1983年にそれぞれ、近代英語協会と日本英語学会を設立し、現在に至っている。

また、高師系は石橋幸太郎(教育大)を編集主幹にすえた『現代英語学辞典』(成美堂 1973)を刊行したが、その中心的編著者に鳥居次好(静岡大、中部地区英語教育学会及び全国英語教育学会を設立)を認めることができる。戦後のガリオア資金(フルブライト奨学資金に継承)を受給して米国留学を果たし、アメリカ構造主義言語学の洗礼を受けた世代である。太田朗(教育大→上智大)もこの系譜である。さらに、共時的英語学つながりで言及するなら、*Treasure Island*『宝島』をテキストにした市河の英語学講読の内容に精緻な註を施した岩崎民平は、のちに音声学と辞書学研究的の礎を東外大に築いたが、その学風は竹林滋に継承されたといえる。

さらに、官学の系譜に加えて、私学のフィロロジ研究については慶應大の系譜に言及しておかねばならない。西脇順三郎(英詩)に代表される英文学科の系譜に厨川文夫→安東伸介や池上忠弘(のちに筑波大・成城大)→高宮利行が連なり、日本中世英語英文学会に貢献すると同時に、国際チヨサー学会や国際アサー王学会でも顕著な研究成果を披露している。英国ケンブリッジの郊外 Bury St Edmunds にマナハウスを改修した中世写本研究の研修センターを設立したことは特記しておかねばならない[次頁の系譜図参照]。

また、比較対照のための補足的資料として、視点を英国ケンブリッジ大学に転じてみると、オックスフォード大学とは異なり、そこにはフィロロジ研究の自律性が英文学科とは別組織 The Department of Anglo-Saxon, Norse, and Celtic (ASN&C)として保証され、当該講座教授職は The Elrington and Bosworth Chair of Anglo-Saxon という冠教授として格式が高い——詳しくは、拙稿「H. M. Chadwick と Anglo-Saxon Studies」(2004)を参照されたい。現在までの歴代8名の主任教授名を記して、参考に附す——スキート(Walter W. Skeat)→チャドウィック(Hector Munro Chadwick)→ディキンズ(Bruce Dickins)→ホワイトロック(Dorothy Whitelock)→クレモス(Peter Clemoes)

文献院古道の意味するもの



[系譜図]

→ページ (Raymond Page) →ラピッジ (Michael Lapidge) →ケインズ (Simon Keynes) (※ケルト系古文書学の教授としてダンヴィル (David Dumville) を擁したが、現在はアバディーン大に移籍)。

- 3) 20世紀初頭において、オックスフォード大学やケンブリッジ大学には学問的制度としての英文学は存在しなかった。それは、日本の大学において、近代日本文学の講座が第二次世界大戦後に設立されたことに似ている。日常生活の中に普通に存在する詩や小説を取って大学で研究する必要性を感じていなかったからである。当時、大学の制度の中で英文学を設置していたのは、スコットランドのエジンバラ大学とアイルランドのダブリン大学トリニティ・コレッジであり、それは Queen's English で知的階層の日常生活が営まれている地域ではなかったことに注意を払う必要がある。
- 4) 東京帝国大学英文科の初期の卒業生は、第1回 (明治24年)「立花政樹」、第3回 (明治26年)「夏目漱石 (金之助)」、第5回 (明治28年)「玉蟲一郎」、山川信次郎、第6回 (明治29年)「島文次郎, 田村喜作」、第7回 (明治30年)「上田柳村 (敏), 長屋順耳, 土井晚翠 (林吉), 伊藤小三郎」であり、漱石の入学前後には専攻する学生がなかった。また、当時の英文科は教員養成が主であって、決して華やかなものではなかった [大村 (2000: 192) 参照]。

- 5) 「何となく英文学の欺かれたるが如き不安の念」は重要句であり、『文学論』「序文」に看取できる。加えて、「私の個人主義」(学習院輔仁会での講演)にも同趣旨のことが強調されている。
- 6) 英国留学中に勉強先に選択しなかったスコットランドだが、漱石は次の2点においてスコットランドと関係をもった。
- ①グラスゴー大学 (University of Glasgow) —— 「Glasgow University の examiner に appoint せらる。直ちに問題を作り領事館に送る」と『日記』にある (1901.3.29)。これは領事館の諸井六郎を通して、日本人留学生のための試験問題委員を委嘱されたことを指している。謝礼は4ポンド4シリングであり、これがロンドン滞在中唯一の臨時収入。当時1ポンドは約10円で、漱石の留学費は月額150円であった [平岡 (1990: 240)]。
- ②ピトロホリーのダングラッホ (Dundarach in Pitlochry) 「蘇国に招待を受けて逗留せるは宏壮なる屋敷なり」と『文学論 (第4編第5章)』にあり、「ピトロクリの谷は秋の真下にある……自分の家は此の雲と此の谷を眺めるに都合好く、小さな丘の上に立ってゐる……」と『永日小品——昔』にある。これは当時 John Henry Dixon (1838-1926) が所有していた屋敷に赴き、ロンドンで精神的にも肉体的にも疲弊した漱石が風光明媚なこの地で一時の精神的快癒を味いつつ、日本庭園造りにアドバイスを与えたことを指している (1902.10)。Dixon はアイヌ文化保護にも尽力し、Perth Museum にそのコレクションが所蔵されている。現在では屋敷はホテルとなっているが、漱石関係の書籍をはじめ日本画や陶磁器が展示されている [本稿筆者は1999.9.23に現地実地調査済み]。
- 7) 池田菊苗 (1864-1936) は漱石より3歳年長の同時代の化学者。当時すでに帝国大学理科大学助教授。ドイツに留学 (オストワルトに師事) し、帰国後、帝国大学教授となった。グルタミン酸が昆布の旨味成分であることを発見し、「味の素」—— 「グルタミン酸塩を主成分とする調味料製造法」を発明した。また、理化学研究所創設にも貢献した。「研究の先鋒になって指導していく力が衰えてきたと感じたら、新進気鋭の人に席を譲って、自分のできることをすべきである」という第一線級の研究者哲学をもって、それを実践したという。
- 8) この件について、上山 (1987: 3) は菅虎雄宛ての葉書 (1902年) を1901(明治34)年2月26日付の手紙だと時期を誤解して、進化論の本を漱石が読み始めたのは、池田菊苗の影響に拠らず、「自発的であることが判明した」と記述しているが、それは事実誤認に基づく推論である。
- 9) 当時1ポンドは約10円で、漱石の留学給費額は文部省との値上げ交渉の結果、年間1,800円 (1ヶ月150円) となっていた。ところが、漱石が留学中に食事にも事欠く貧乏をしながら英文学研究関連の書籍を買いたい求め、それ

を下宿で熟読したことはつとに知られた話であり、当時の明治政府（文部省）から留学費用を年間1,800円も給付されながら、漱石よりも十数年先んじてドイツに留学した森鷗外が比較的優雅な生活を送ったのとは対照的に、どうしてそこまで貧窮した生活を強いられたのかが不可思議である。これについては、漱石研究の第一人者の江藤淳が「明治政府の国策による〈為替レート〉の変動説」を主張している。日本政府が明治中頃に、輸出強化策として、故意に円安を導入した結果、鷗外の頃に1ドル=1円であったレートが、漱石の頃には1ドル=2円という為替相場になっていたのだという。すなわち、円の価値が半減したことになる。国際経済が漱石を苦しめたということであろうか。

- 10) 「陰鬱な倫敦」という表現は Transferred Epithet（転位修飾・転喩）の典型。例えば、gloomy weather / married life / their drunken wrath / a hasty cup of tea 等、論理的には被修飾語の特性を表わさない修飾関係及びその修飾語のこと。
- 11) 『文学論』に対する自己評価には18世紀英国の哲学者ヒューム（David Hume, 1711-1776）の影響を認めることができる。ヒュームの『人間本性論』が世間の注意を一向に惹かなかったことに対するヒュームの自己批評がここにそのまま重ねられた言表である〔小森陽一「注解」『私の個人主義』〈岩波書店 漱石全集〉参照〕。
- 12) この記述にある、文部省に漱石が病気だと打電した「ある日本人」というのは、同じ時期にロンドンに在った岡倉由三郎（1868-1936）（岡倉天心の実弟で英語学者にして、後に東京高等師範学校教授）ではないかと長く嫌疑をかけられてきたが、高弟の福原麟太郎（1894-1981）は否定しているとのこと〔大村（2000: 85-107）参照〕。
- 13) 「則天去私」は「小さな私を去って自然にゆだねて生きること」と『広辞苑』にも採録され、人口に膾炙する句。「近代知識人のエゴイズムの深淵に触れた夏目漱石が、その晩年に未完の作品『明暗』で表現しようとしたとされる東洋的悟達の心境」と理解される（『学研 新世紀百科事典』1978）。

## 参考文献

- 上野景福（1982）「ディクソン伝の補遺」『大村喜吉教授退官記念論文集』吾妻書房。
- 上山昭則（1987）「夏目金之助教授（漱石先生）と進化論」『生物科学記事』4, 1-16。
- 江藤 淳（1970）『漱石とその時代〈第二部〉』新潮社。
- 大森裕實（2004）「H. M. Chadwick と Anglo-Saxon Studies」『愛知県立大学外国語学部紀要〈言語・文学編〉』36, 407-420。

- 大村喜吉 (2000) 『漱石と英語』本の友社.
- 亀井俊介 (2007) 「注解・解説」『文学論 (上)(下)』〈夏目漱石著 (1906), 文庫版〉岩波書店.
- 川島幸希 (2000) 『英語教師 夏目漱石』新潮社.
- 小森陽一 (1995) 『漱石を読みなおす』筑摩書房.
- 小森陽一 (2010) 『漱石論』岩波書店.
- 清水一嘉 (2001) 『自転車に乗る漱石——百年前のロンドン』朝日新聞社.
- 寺澤芳雄 (1978) 「市河三喜と日本の英学」『明治・大正の学者たち』東京大学出版会.
- 夏目金之助 (1995/orig. 1914) 「私の個人主義」『漱石全集』16, 581-615, 岩波書店.
- 平岡敏夫(編) (1990) 「ロンドン留学日記」『漱石日記』〈夏目漱石著 (1900-01), 文庫版〉岩波書店.